夏ふたり

白猫ノ夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏ふたり

【Ｎコード】

Ｎ９３３０Ｅ

【作者名】

白猫ノ夏

【あらすじ】

高校に入ってから二回目の夏休みに僕、須藤純也（すどうじゅんや）は同級生の少女、北風氷柱（きたかぜつらら）に大切なものを探してと頼まれて・・・

第一章の1！

プロローグ

僕はあの夏、何か確かな物を手に入れた。
それは脆くて壊れやすいガラクタだったのかもしれない。
でも、僕にとっては、すごく大切なものになった。
そう大切なものは両手でしっかりと、でも優しく掴んでいなければすぐに落として壊れてしまうから、僕は・・・
僕は彼女を強く、強く抱き締めた。
夕日が差し込む観覧車の中で僕は彼女に告白した。

第一章　幸せって、何だろう？

夏の日差しが照りつける中、クーラーの無い教室で僕、須藤純也（すどうじゅんや）は補習を受けていた。
僕はなぜか生まれつき運に見放されているのか、いつもテストの日になぜか風邪を引いてテストの期間か終わるといきなり、何も無かったかのように元気になるのだ。
そんな僕と同じ教室で補習を受ける生徒がもう一人いた。
名前は北風氷柱（きたかぜつらら）と言って名前のとおり冷たいと周りから言われている人だ。
いつも何を考えてるのかわからないからかクラスでも浮いてる存在になっている。
そして普通こういうキャラは成績優秀だから浮いているものだが彼女は違った・・・
「ルルルルルル」そう小さく呟きながら真新しい動物の形をした、いかにも消しにくそうな消しゴムでプリントをゴシゴシ擦っている。

そうこれが彼女がクラスで浮く原因その名も・・・

不思議騒音マシーン！　（ジャジャーン！とか流れている・・・はず）

まぁ、簡単に言うと時々チャネリングをしてないとダメな人種なのだ。

それはさて置き最近僕は彼女・・北風とやっている事がある。それは・・・

補習の一回目の日に起こった。

「一緒に大切なものを探してくれ～？ＵＦＯじゃなくて？」

僕は補習帰りに北風に呼び止められ今や寂れて誰も来なくなった公園で告白でもされるのかと思ったら探し物を一緒に探してくれと言ってきたのだ。

どうやら大切な物を失くしてしまったらしい。

だけど大切な物が何かはまだ教えてもらっていない。

大切なものが何か聞いても北風は首を横に振るばかりで教えてくれない。

「じゃあ、どうやって探せばいいのさ？どんな形かわからないものは探すなんて不可能だ。それに大切ならちゃんと掴んどけよ。そうじゃないと・・・いや、なんでもない・・とにかく、だ。どんな形をしているかくらい教えてくれたって良いんじゃないのか？」

北風は僕の問いに少しだけ考えてから、ふらつきながら答えてくれた。

「えっとね、う～んとね～・・・・・わかんない。」可愛いとこもあるんだなと思いつつも「わからないのかよ！」僕は癖でツコッミを入れてしまう。

そのツッコミに北風は驚いたのかビクッっと振るえて、その場に座り込んでしまった。すぐさま僕は北風の手を掴んで近くのベンチま

で連れて行ってそこに座らせてあげた。
「北風ごめん・・・大丈夫か？」と言いながら僕はそっと北風の背に触れる。すると北風はすぐに僕の手を払い除けるとバッと立ち上がり僕に向かって強い口調で
「わ、私に触れないでっ！」そう言うと走ってすぐそこの木の後ろに隠れてしまった。
僕は少し迷ったが北風の隠れている木の前まで歩いていって
「ねぇ、北風・・・」僕はそこまで言って言葉を詰まらせた。それから数秒間、木々の葉が風に揺られる音だけが二人を包む。
「北風はなんで僕に大切なものを探してってお願いしたの？」その僕の問いに北風は冷たく「暇そうだったから」僕の予想通り少し寂しい答えが返って来た。
「ねぇ、北風、人と話しするときはちゃんと顔見て話さないと気持ちは伝わりにくいよ？」そんな僕のアドバイスも空しく北風は「帰る」の、ひと言と僕を残してさっさと帰ってしまった。結局、大切なものが何かを聞けないまま次の日、僕が補習の二回目を受けに行った帰り北風に
「なにモタモタしてるの？探しに行こうよ。」そう言われたので断ろうと口を開きかけたとき、北風に腕を強く引っ張られお昼過ぎの街中に連れて行かれてしまった。
こうして僕は無理やり大切なもの探しとやらに付き合わされることになってしまったのだ。

第一章の1！（後書き）

えっとこれから二週間に一度のペースで載せていきたいと思っていますが、まぁあまり期待しないでください。願いの形も止まっていますのでそっちの方も書かなきゃなのでね。
今回のも途中で番外編にそれなきゃ良いけど・・・

第一章の２！（前書き）

今回も短いです。
会社や学校へ行く途中に読んでる方はあまり時間を潰せない！ってくらいの短さなのです。
ここらへんだとまだ笑えるかどうか、泣けるかどうかは読者の問題ですが引き返すなら今のうちですよ。
それでは期待しないでお読みください。

第一章の2！

2

遊園地は駅から少しはなれたところにあり、作られたのは三十年くらい前だ。
作られた当初からある伝説が生まれた。その伝説とはこの遊園地に好きな人と二人で来て最後に夕日を観覧車の中で眺めながら告白するとずっと一緒に居られるらしい。本当のことかは僕にはわからないけど、その伝説があるからこそ、この遊園地は今でもやっていけてるのかもしれない。僕が住むこの町はド田舎じゃないにしても田舎は田舎だ。だからいつ寂れて消えるかは僕にも他に人にもわからない。そんな遊園地には田舎とは思えないくらいの人が溢れかえっている。土日となれば一日で一万人は訪れるといわれている。
そうなれば遊園地にとってはバンバンザイだろう。ただし今日は平日だから大丈夫と思いきや、すっかり忘れてました。夏休みの存在を僕は夏休みも補習のせいで学校に行ってるから実感が湧かなかったけど世は夏休みの真最中！それでも僕と北風は補習帰りに遊園地とは、まぁお気楽なことですこと。そんな台詞が周りから聞こえてきそうな中、遊園地の人込みの中に入っていった。
遊園地に入るなり北風がジェットコースターを指差して
「まずはあれから乗ろう！」と言ってジェットコースターの乗り場まで僕の手を引いてダッシュ！僕の心臓はドキドキ、北風は全く気付いていないようだけど、本当はどうだろうか？北風に握られている僕の手は今、汗ばんでいて気持ち悪いはずだ。それなのに手を離さないということは三つ考えられる。一つ目は自分の手も汗ばんでいて気付かない。二つ目は汗ばんでいる手が好き。そして三つ目は・・・

北風はドドドド天然！・・・ドはこれくらい無いと足りないかもしれない。

間違いなく、これで決定だろう。そう確信した僕は当初の目的を思い出した。

そういえば僕たちは大切なものを探してるんじゃなかったっけ？なのになぜ遊園地でアトラクションに乗って遊ぼうなどと・・・・それから一時間半後、僕はそんなことを考えてる暇を与えられなくされた。もちろん北風氷柱の手によって・・・

第一章の2！（後書き）

えっと前書きを読んで引き返した方々はこの後書きを見てません・・・よね？
まぁ前書きと後書きだけ見るなんて事しませんよね～？
とにかくこの後書きを見ている方々にお知らせです。
このお話しですが書き終わりました。
最後の最後まで。
毎日、夜の十二時から朝の六時くらいまで書き続けたらあっという間に書けちゃいました。
ですから次の「第一章の3！」から毎週月曜日に更新します。（忘れなければ・・・）
これからも暇つぶしにでも読んでください。
そして面白ければ笑ってください。
登場人物がボケたらツッコンでください。
それが（たぶん）作者のやる気に繋がる・・・はず。

第一章の3！（前書き）

あやうく忘れてしまうとこでした。
危ない危ない。
今回はまぁまぁ長いかなぁ？
そしてこの第一章の3！から
笑える人は笑ってしまう。
って方向へそれます。
既に前書きの時点で「私は笑えない」と思ってしまった方は引き返した方がいいかもしれません。
どうしても読みたいというなら止めませんが・・・
それでは長い前書きを読んでしまった方も本編へ、お進みください。

第一章の3！

3

園内の時計で午後の六時を回ろうとしている頃、僕は北風と一緒に観覧車に乗るため列に並んでいた。だが僕は既に瀕死の状態だった。そう僕はジェットコースターなどの恐怖アトラクションが大の苦手だったことにジェットコースターに乗り安全レバーを下ろしたところで気がついたのだ。

遅かったのだ、気付くのが。遊園地に着いたときには気付いてるべきだった。

遊園地＝恐怖の遊び場ということに・・・

そうあれは僕がまだ小さい頃の話。

僕は小さい頃、両親に連れられ遊園地に遊びに行ったことがあった。小さい頃と言っても小学校の四年生の夏休みだったので背はある程度伸びていたので大抵の絶叫マシーンに乗ることが出来たのだ。

そして僕の親は絶叫マシーンで知り合い結婚へとつなげたある意味ですごい夫婦らしい。

その頃の僕には絶叫マシーンを目の前にして『面白そう・・・』と呟いていたのだが・・・僕は絶叫マシーンの本当の恐ろしさをまだ知らなかったからこそ出た言葉だった。

その日は最悪の日と化した。親が親なので必然的に絶叫マシーンのフルコース！

しかも！その遊園地は絶叫マシーンが大量に犇く地獄で僕がいくら親に『観覧車、乗りたい！』と言っても聞く耳持たずで『あっちの３６０度連続回転コースターに乗ろう！』とか言って自分の子なんて、ほっといて自分たちだけで楽しみ最後に僕の乗れるやつに乗ったがその辺の絶叫マシーンとは違ってお化け屋敷＋ジェットコースターですごい不気味な声が後ろから追ってきてそれから逃げるよう

にコースターが左へ右へとクネクネ曲がりさらに途中にびっくりするような仕掛けや音があるものだから終始びっくりしっぱなしで休む暇なんてあるわけが無く。しかもそんなのを三回も連続で乗ったものだから次の日、僕は自分の部屋で布団被ってずっと、うずくまっていましたとさ。
それのおかげで絶叫マシーンにトラウマ感じちゃって乗った次の日は布団被ってうずくまっている。だが最近はそれを理解する友がいるからか、絶叫マシーンに乗らず・・・というか、そもそも遊園地に来ることが無くなり少々油断していたのかもしれない。
その油断が招いた結果が今日のこれと言うわけだが・・・しかし、困った。
僕は考えてみれば生まれて一度も観覧車に乗ったことが無かったのだ。
そんな調子で大丈夫か？自分！と、問いかけたくなったが止めた。だってそんなことしたら寂しい人みたいじゃないか！いや、実際一人で考え事をし捲くっているのだから、それはそれで寂しい人なのかもしれない。
ただ、このとき僕の頭の中には一つの想いが詰め込まれていた。
それから数分後、僕たちの番が回ってきた。まず最初に北風が乗り込む次に僕がゆっくりと乗り込みドアが閉められる。これで観覧車が一周する間、僕たちは二人っきりになる。
たしか、この観覧車は一周するのに約二十分だから一番高いところに着くのは約十分後ということになる。
十分かぁ、長いな～と僕は心の中で呟きながら窓の外を見る。
見る見るうちに人が小さくなっていく。そして僕がそんな風景を見ているうちにあっという間に一番高いところまでついてしまった。
そこでちょうど夕日が僕たちを赤く染める。ふと僕が思い出したかのように北風に
「あのさ北風、僕さ、君のことが好きみたいなんだ。君と手を繋ぐとドキドキするしそばに居るだけでもドキドキと心臓が音を立てる

んだ。だから・・・だから北風・・・いや、氷柱さん、僕と付き合ってください！」言ってしまった。等々言った。僕の想いを北風に伝えた。筈だったんだ。でも僕の想いは意外な物に阻まれた。それは・・・

「氷柱さん、どうかな？僕じゃダメかな？」そう僕が言いながら北風の方を見ると

北風はすぅすぅと可愛らしい寝息を立てて寝ていたのだ。しかも立ったまま・・・なんて器用なんだ・・・・じゃなくて！

「なんで聞いてないんだよっ！」僕は思わず小さな密室空間の中で大声で叫んでしまっていた。それに追い討ちをかけるように僕の叫び声で起きた北風が

「なに叫んでるの、うるさい！」と言って僕のスネをおもいっきり蹴ってきた。

そして僕は

「痛ってーーーーーー！」二度も小さな密室で叫んでしまった。

第一章の３！（後書き）

笑えましたか？
それとも笑えませんでしたか？
笑った人も笑わなかった人も楽しめそうな後書きの始まりです。
今回のお話は遊園地でした。
そして次回は・・・
遊園地から帰る途中、須藤純也は突然！黒服の男二人に拉致られて
見知らぬ国に連れていかれた。
その国で出会った少女は北風より可愛くて・・・
そういうお話ではありません。
・・・・・・たぶん。
それでは「第一章の４！」では笑ってやってください。
ジョワッ！！（飛べずに落下）

第一章の４！

４

あの恐怖の観覧車告白事件から三日後、僕はやっと動けるようになり補習に向かおうと部屋で準備をしている途中で気がついた。
「そういえば補習って午前だっけ？」僕は部屋にある唯一の目覚まし時計を見た。
時計の針はすでに四時を指していたのだ。
完全に忘れていた。まぁ、これで暇になったわけだがやっぱり北風に会えないのは僕としては少し寂しいものだ。
あのあと結局、観覧車での告白は失敗に終わり遊園地を出るとすぐにそれぞれ帰路についたのだから丸二日と十数時間くらい会ってないことになる。僕は少し考えた後、北風の家を訪ねることにした。
だがすぐに重大なことに僕は気がついた。それは・・・
「僕って北風の家、知らないし」これは大変な壁にぶつかった。
僕が自分の部屋でそんなことを考えていると現代でもっとも最強に近いキャラ
ツンデレ委員長が僕の家のチャイムを鳴らした。
僕はツンデレ委員長こと水谷桜を家に入れるなり自分の部屋に強引に連れ込んだ。
「で、今日は何のようですか？委員長さん♪」僕は水谷に早く帰ってほしそうに言うと彼女は自分の艶々の黒髪をイジリながら
「あのさ～純也？あなた、補習帰りに女の子と一緒に遊園地に、い・・・行ったらしいじゃない？べ、別に気になるわけじゃ、な・・・ないんだけど・・・誰と行ったのかくらい、幼馴染の私に、お・・・お・・・教えてくれても、い・・・良いでしょ？」途中かなり突っ掛かったりしたが水谷は最後まで言い終えた。ただ、僕はこの状態の水谷が好きにはなれなかった。なぜならいつも、この状態になったとき

僕は「なんで分からないの？」と言われ、ポカポカと叩かれたりしたからだ。とにかく僕はこの謎を生きているうちに解明できるのかすら怪しい。
「え、えっと今日はもう帰ってくれない？」と焦り気味の僕が水谷にそう言うと水谷は
「な、なんで帰って・・・ほしいの・・よ！」と僕をまたポカポカと叩きながら言った。
僕はどう返して良いかなどと考えていると水谷が
「わかった。私、帰るね。」と言って僕の部屋から出て行った。
その時の水谷の背中は少し寂しそうだった。

第一章の４！（後書き）

今回は後書きだけですよ～
前書きは無かったですよね～？
まぁ、あったらあったでそれこそ不思議な物になってしまいますが・・・
そんなことはどうでも良くて
第一章の４！について解説なんて面倒なものも書く気はありませんので適当に次のお祭りメイン！てか、このお話しの楽しい部分はお祭り・・・・のはずなんですが・・・人によっては後半のあっちが良いかな？それともちょっと先にあるあのイベントかな？
そこは読む人それぞれ面白いところは違うわけだから読む人の数だけ面白い部分があるはずですのでこれからも、よろしくお願いします。
（あ～もっと宣伝するべきか、しないべきか・・・）

第一章の5！

5

僕には水谷にどうしても帰ってもらわなければいけなかった。なぜなら今日は近所の神社でお祭りがあるのだ。その神社と言うのは僕が住むこの町の中心にあって昔から人々を邪悪な存在から守るとされているが僕はまだ一度も守ったと言う話を聞いたことが無い。どちらかと言うと悪いイメージがあるらしく例えば、おみくじを引けば凶が出るし受験に受かるようにとお守りを買えば全てに落ちる。こんなんじゃお祭りやっても人が集まらないんじゃないか？と思うだろうけど何故だか人は集まる。その理由が気になって小学生の頃調べたところ、この神社は叶えてほしくない願いを叶えて叶えたい願いが叶わない。

つまり逆をお願いすると絶対に叶うのだ。

昔こんなことがあったらしい。それはそれは幸せな夫婦がいました。でも、あるとき妻が重い病気かかってしまい医者からは『もう、あとは死を待つだけです。』と言われたらしい。そのことを信じたくなかった夫は不幸の神社にこう願った。

「妻を死なせてください。」夫は妻がこれ以上苦しむ姿を見ているのが辛かったのだろうか？だからそんなお願いをしたのだろうか？今はもう、わからないけど、その願いが叶ったのか妻はあっという間に元気になり八十歳のとき夫と二人で一緒に安らかに眠ったと言われている。そう言われているだけなのだ。本当かどうかは知らないがそのお話しの効果か、わからないが神社が儲かっていると言うことだけは僕にだってわかる。そして不幸の神社は逆神社と呼ばれて今や観光名所になるくらいまですごくなってしまった。そこで開かれるお祭りだから人込みが出来ないわけが無く、それはもう町中がお祭り騒ぎで一晩で終わってしまうのが寂しいくらい楽しいお祭

りなのだ。
まぁ、どんなお祭りでも終わってしまうのが嫌だというのは変わらないんだけど・・・
このお祭りは他のお祭りと違う楽しさがあるんだと思う・・・たぶん・・・・・きっと。
そんなことを馬鹿な頭で考えたって仕方ないか～と僕は自分のベットに寝転がる。ふと部屋の時計を見るともうお祭りの開始時間を過ぎていることに気がつく。
「やべっ！」と僕は言いながらすぐに起き上がるとこの日のために一年間貯めたお金を机の中から取り出す。
まぁ、一万円くらいはあるだろうという五百円玉を今では珍しい赤い色の小さいがまぐちに無理やり詰め込むと早足でお祭りの会場となる逆神社に向かった。

第一章の5！（後書き）

次の小説を書いてて寝る時間が少ない。
全然書き終わる気配なしの小説。
一週間ごとに更新される小説。
全てが圧し掛かってきて遊ぶ暇が無い。
ってのは嘘で遊びまくっております。
だから夜中に書くんですが・・・

今回はお祭りに向かうとこで終わりましたね～
何を考えて書いていたのかもう思い出せませんが
これって全然進まない小説だな～
と、最近思うわけでして・・・・
あれ？先週更新したっけ？とか作者が忘れるのどうにかせい！そんなことを思ったりもしますが作者ってよく考えなくても自分なんですよね。
そして後書きの最後にこんなこというの変かもしれませんが言います。
いつか本文より後書きの方が絶対に長くなる。

第一章の6！

6

神社に着くと僕はまずお賽銭箱・・・ではなく、普通お賽銭箱のあるはずの場所に置いてある両替機にがまぐちから出した五百円玉を次々と入れて百円玉に替えた。
それから屋台の方に歩いていきお目当てのものを見つけた。
それは屋台と屋台の間に三台ほど置いてあり、そこには小学生くらいの子供たちが二十人くらい集まって「よしっ！落ちるな！落ちるな！・・・あぁ～」と大きな声で言い合っている。
それを近くにいた親が「違う違う、こうやるんだ」と言って子供たちに混じって楽しんでいる。
子供たちの集まっているのは主に三台目、僕がやろうとしているやつもそれだ。
僕は小学生たちのいる方に向かおうとした。
その時、見えてしまった。
会いたかった、その人を・・・
涼しげな白い薄手のワンピースを着てその人は小学生のグループの横の台で無表情で少し大きめのぬいぐるみ（・・・・・）を取っていた。しかも、その人の周りには紙袋とぬいぐるみで出来た山があった。そして紙袋はその人の横にまだ二十枚近くある。いったい何個取る気だ？そう思い僕は勇気を出して、その人に話しかける。
「あの北風？」僕がその人の名前を呼ぶとその人は驚いた顔をして僕の顔を見つめてくる。
十秒くらい見つめあったあと北風が「あっ！須藤くん・・・だっけ？」その時の僕には抑えることが出来なかった。
「忘れてただけかっーー！！」

そのツッコミは周りの人全員を僕の方に振り向かせるほどの大声で放たれて北風の耳に届いた。
そしてこの時を境に僕の北風へのイメージが変わった。
正確に言うと属性が変わったんだと思う。
不思議ツンデレから萌え不思議領域天然少女系、略して・・・

もふてし！

って意味わからん！自分で言っておいてバカだな～と、つくづく思う。
それはさておき、そろそろ周りからの視線攻撃に耐えられなくなってきた僕は北風と北風の取った、ぬいぐるみの詰まっている紙袋をしっかりと掴むと一旦その場から離れ近くの誰も使わなさそうな小さな公園（ほとんど広場）に走って逃げ込むと北風と紙袋を放す。
解放された汗だくの北風とぬいぐるみ達はその場に寝転がった。（ぬいぐるみは紙袋から零れ落ちてその辺に転がった、だけ）
「北風・・・ごめん、疲れた？なにか飲み物買ってこようか？ラムネで良い？ちょっと待ってて買ってくるから！」寝転がっている北風を見ながら焦って自分ひとりで話しを進めて飲み物を買いに行こうとした。
北風は今にも泣きそうになりながら寝転がった状態のまま僕の足を両手で強く掴んで
「いやっ！行かないでっ！どこにも行か・・・ないで・・・・・よ」
そう弱々しく叫んだ。
でもすぐに北風の手から力は失われてあっさりと僕の足は解放されてしまった。
僕が北風のほうをもう一度見ると汗で髪が張り付いている顔や体をふるふると震わせて僕の方を見て泣いていた。
悲しそうじゃなくて、寂しそうに泣いていた。

それを見てしまった僕は体のどこからか罪悪感が押しよせてくるのを感じた。
自分が嫌になった瞬間だった。
北風を泣かせた。
北風の笑顔を見たかった自分が笑わせるのではなく泣かせたのだ。
死にたいなんて僕は絶対に思わない！自殺する奴はバカだ！とまで思っていた僕は今、死にたいと思ってしまった。
ほんの一瞬だけど死にたいと思った。
僕の中ではたぶん北風を殺すより酷いこととして認知されていたのだと思う。
結局、僕は臆病なだけだ。
北風に嫌われるのが嫌で北風に振り回されても文句一つ言わずに振り回され続けたし、北風が傷ついたときは真っ先に謝った。
たとえ僕が悪くなくても謝ってしまうくらいに北風に嫌われたくないのだと、たった今気付いた僕が僕の心の中に居た。
ひんやりとした手が僕の手に触れたことで考えることを止めるしかなかった。
そのひんやりとした手は北風の手だったから。
北風の両手は僕の右手を包むように掴んでいた。
「ごめんね、止めて」北風はそう呟くように言うと立ち上がってワンピースに付いた砂を掃おうともせずに僕に抱き付いてきた。
僕の顔は一気に紅潮し茹で上がった海老の様に赤くなった。
反則だ！こんな心が緩んで隙間が開きまくっているところに抱きつくなんて、心臓の鼓動が早くなり、そして北風に聞こえるほど心臓の音が大きくなったように感じた。
僕はすぐに突き飛ばすような形で北風から離れると膝がカクンと曲がり僕の体はその場に崩れ落ちた。
まだ僕の心臓は高鳴っているのがわかった。たぶん顔もまだ茹で上がった海老だろうけどそんなのはどうでも良かった。
僕はすぐに立ち上がるとふらつきながらも北風の前まで行って

「レッドカードっ！！」と言いながら右手を上げて、もう片方の手を北風に差し伸べた。
すると立ち上がりながら北風は萌え不思議領域天然少女系的な質問をしてきた。
「れっどかあど、ってなあに？」この言葉で僕はいつもの僕に戻れたのだから北風には感謝しなければならないだろう、でも今は・・・
「パソコンでサッカーのルールを調べろ！」ツッコミたい！
「ぱそこん無い」
「なら図書館かどこかで・・・」
「それとさっかー、ってなに？」
「・・・・・・」僕は言葉を失った。
今時サッカーを知らない子供いたとは驚いた。
そんな絶句している僕を見た北風は
「やきゅう、って言うのなら知ってるよ！」と元気よく言った。
サッカーではなく野球を知っているのか？と疑問に思い僕が北風に野球のこと聞くと
「やきゅうはね、エンカイってところでやる遊びなんだよ、それでね、オジサンが変な掛け声を言いながら変な踊りを踊るのっ！」
僕は心臓のドキドキなんか忘れて今度は頭の痛みに耐えなければいけなくなってしまった。
正確には凄い勘違いを訂正しないといけないのである。
野球と野球拳の違いを目の前に立つ僕に学校では決して見せることの無い表情を撒き散らしながらニコニコしている萌え不思議領域天然少女系の少女に。

第一章の６！（後書き）

風邪をひきました。
喉の風邪は辛いですよ～
・・・・後書きが段々ブログのようなものになっていますね～
書かなければ良いんですが書きたいんですよね～やっぱり。
それにお話しが一週間に一つじゃ少なすぎるんです。
書き終わっているのだから一気に出せば良いじゃん、って思いますね～でも毎週の楽しみが消えるんです。
楽しみかは人それぞれですが、この第一章も残り４くらいですので読みたい方は毎週月曜日を忘れずに・・・
（第一章が終わったら第二章か・・・いつ終わるんだろう・・・・・）

第一章の7！

7

野球と野球拳の違いをキッチリ北風に教え込んだ僕はお祭りがもうすぐ終わってしまう時間になっていることに気が付いた。
「やばっ！もうすぐ花火が始まる！」と僕は大きな声で言った。
僕が大きな声で言ったのには理由がある。
周りが人でいっぱいでうるさいからだ。
そうこの逆神社のお祭りで驚くところはゲーセンだけじゃない。
花火もすごいのだ。
どこがすごいかってのは数を聞けばわかる。
神社のお祭りで一万発は普通ありえんだろ？でもここは普通の神社じゃない、そう逆神社なのだ。
年中、何人もの人がここにお参りに来るものだから儲かるのなんのって、それにこの町は少し田舎って部分もあるから少しでも都会から人を集めたいって思いがあるのだろう、だけどこれは少しやりすぎだと思う・・・が、そんな一人の住民の声も空しく毎年のようにこの町には「た～まや～♪」などと言う声が、むしろ騒音がこの町に鳴り響くのだ。
普通は苦情の一件や二件きても良いはずなのだが全く来ないのだ。
しかも苦情が来ないのに対して御礼や良いところの電話が殺到。
それが原因かは知らないが年々お祭りの規模は今も拡大し続けていた。
花火を打ち上げる数も年々増えていき一万発にまで達したというわけだ。
そしてこれからその花火が打ちあがろうとしていた。

ドーン！

それを合図にしたかのように周りが一気に騒々しくなる。
そんな中、僕の隣で次々と打ち上げられる花火を真剣に見つめる北風が居た。
僕は花火が打ち上げられている間ずっと北風を見ていたそのせいで気付けなかった。
途中、北風の出したサインに気付くことが出来なかった。

花火の最後の一発でその場にいる大勢の人がいっせいに

「た～まや～～♪」

その騒音がお祭りが終わったことを知らせた。
僕の隣で北風はお祭りが終わっても少しの間は空を見上げていた。
まるでこの町との別れを惜しむような眼差しで。
でも僕のそんな考えは北風の言葉ですぐにどこかへ消えてしまった。
「ありがとう、一緒に居てくれて、これ・・お礼。」と言いながら北風はぬいぐるみの詰まった紙袋の底をあさり始めた。
あさること十秒。
北風はお目当ての物を取り出した。
それを見た僕は「あっ！」と声を上げてしまった。
それは僕が今回のお祭りのクレーンゲームで取ろうとしていた物だった。
新型の携帯ゲーム機、それを北風は僕に差し出してくる。
「えっ？いや、あの・・・貰って良いの？」こんなときに欲が出てしまうのが僕の悪い癖だ。と自覚していながらも言ってしまった自分がどうしようもなく情けない。
だが北風はそんなことを気にせず「うん！」とだけ答えた。
そして僕は新品の新型の携帯ゲーム機の入った箱を手に取る。
すごく嬉しかった。

欲しかったものを手に入れた嬉しさよりも好きな人から貰ったということのほうがすごく嬉しかった。
僕は北風に「ありがとう！」と言うと北風をその場に措いて走って家まで帰った。

次の日、僕の家の郵便受けに北風からの手紙が入っていた。
措いていった罰の言葉と今日の午前十時に隣町の駅に来てと書かれた紙が入っていて、おまけにホラー映画のチケットが入った恐怖の手紙だった。

第一章の８！（前書き）

前回は後書きも何にも無しでしたので
今回こそは書こうとした、久々の前書きです。
えっと今回のお話はですね～

長いです。

読むときに注意してください。
ちょっとした空き時間では読むことの出来ない無い人がいると思いますので・・・
では、始まり始まり～♪

第一章の8！

8

映画が終わると僕はまず外に出ようと立ち上がろうとしたのだが無理だった。
僕の右手をガッチリと白い腕がまとわりつくように固定しているからだ。
僕はその白い腕を見た瞬間、声を上げそうになったがギリギリのところで押さえ込んだ。
その白い腕の持ち主が北風だと気付けたからだ。
北風を良く見るとすぅすぅと可愛らしい寝息を立てながら眠っていた。
それを少しニヤけながら僕が見ていると劇場の照明が点いたせいか北風が「ん？」と言って目を擦りながら起きた。
北風の目が覚めても僕のニヤけた顔が元に戻るわけがなく、僕は顔が見えないようにそっぽを向いた。それを見た北風がそっぽを向いた僕の顔を覗き込むように見て
「なんか疚しいことでも考えてた？・・・別に良いよ」そう優しく言ったがその顔は全然優しそうではなかった。
違う、優しそうではあった、あったが、後ろに黒いオーラ的なものが見えた気がしただけだのだがそれが一番怖かった。
とにかく僕は北風を連れて外へ出る、すると夏の暑〜い日差しが出迎えてくれた。
そもそもなぜ涼しい映画館内から早く出たかったのかというと、それは遡ること約二時間前のこと・・・・
待ち合わせ場所でちゃんと北風は待っていてくれていた。ボロボロになった僕が来る三十分も前から・・・

「遅いっ！」と言う厳しい声で出迎えてくれたのは北風で、北風はちゃんと十時には待ち合わせ場所に着いていたはずなのだ。
そう全部僕が悪いのだ。
手紙を読んだのが八時くらいで、そんなの楽勝！と思っていた僕は準備をのんびり進めて気付いたらいつの間にか時計の針は九時半を指していた。
やばっ！と思った僕は慌てて家を飛び出し駅へと向かったのだった。
それが間違えだったことにはすぐに気付くことになる。
家から駅まで走って十五分それから隣町まで電車で十分で行ける・・・・はずだった。
さて切符を買おうと財布を出そうとウエストポーチを・・・「持ってくるの忘れたー！！」
慌てていたので忘れてきたのだ。
財布の入ったウエストポーチを家に・・・。
僕は来た道をダッシュで戻る・・・「疲れた。」ダッシュ「疲れた。」を繰り返しながら家に向かった。
家に着くなり僕は「ただいまっ！」と言って階段を駆け上がる（全力で）と自分の部屋に入りウエストポーチを取ると今度は階段を駆け下りる（全力で）と「いってきますっ！」と言い残し最後の力も残っていない体で駅まで走って向かった。
僕の運の悪さがここで発動するか？ってくらい悪いタイミングで発動した。
僕が電車に乗り込み空いていた席に座ると、そのタイミングを狙っていたかのように
「えーこの先の駅で人身事故が発生しましたのでしばらくお待ちください。」と駅の構内アナウンスがイキナリ最悪を伝えた。
僕は疲れているにも関わらず「ふ、ふざ、けんな～」と力無くツッコンでしまった。
これは僕の中に流れている血のせいか？いや、僕の親はどちらも田舎それもドの付くところの生まれだからそれは無いか・・・いや、

もしかしてお爺ちゃんとかが・・・
僕がそんな今はどうでも良いようなことを考えていると呪いが解けたかのようにとつぜんさっきと同じように
「えー大変申し訳ありません事故は無かったらしくすぐに発車しますのでしばらくお待ちください。」と構内アナウンスで伝えられた。
アナウンスで伝えられたとおり、僕を乗せた電車はすぐに動き出し目的地へと向かった。

そして着いたのが十時半、まぁ普通は怒るよな～暑い中で三十分も待たされりゃ。
それでも僕が遅れた理由を教えれば北風は「ルルルルル♪」とチャネリングしてから空を見上げて優しく微笑むと「よかったね！」と言って僕の方見て「早く行こっ！」そう言って僕の腕を掴むと映画館へ走り出した。
絶対に走りにくそうなヒール付のサンダルを履いてフワフワのワンピース姿で元気よく走り出したのだ。
僕には何か急いでいるようなそんな気がした。

映画館は森の中にあり完璧に廃墟に見えた。
そんなことはお構い無しと言わんばかりに北風は普通にその中へと入っていく。
僕は森がやけに静かで怖かったので北風の後に続くように映画館へと入っていった。
入るとまず目に付くのはやけに豪華な噴水だった。
そして何故だかさっきまでの暑さは消え去り寒気に変わっていた。
「こっちだよ～」と噴水の奥の扉の方で手を振っている。
とにかく僕は北風と一緒にいなければいけない気がして急いで北風のいる方へ向かった。
北風の傍に行くとそこには三十歳を過ぎたくらいの男の人と、その子供らしき五歳くらいの女の子がいた。

北風は何の躊躇いも無く手提げ鞄からチケットを取り出すと男の人に渡す。
僕も北風と同じようにウエストポーチからチケットを取り出すと同じように男の人に渡した。
すると勝手に重たそうな扉が開き北風はその中に引き寄せられるかのように入っていった。
すぐに僕もそのあとを追いかけて入っていきそれから二人でホラー映画を見たわけだ。

外に出たかったわけは体ではなく心が冷えるような寒気がしたからそれと僕たちを合わせて三十人くらいいたにも関わらず僕と北風以外に誰も映画を見ておらず僕の方をじっと見ていたからだ。
ホラー映画の内容よりそっちの方が怖かった。
だけどそんな中ですぅすぅと寝息まで立てて眠っていた萌え不思議領域天然少女系の北風は今も眠そうにあくびをしながら僕のあとをフラフラとついてきている。
森を抜けると砂浜に出た。
真っ白い砂浜の誰も人がいない、ただ波の音だけがあるその砂浜に僕と北風は辿り着いたのだ。
砂浜の先には青く綺麗な海もある。
海は太陽の光を反射してキラキラと光って僕たちを誘っているように見えた。
北風は僕の横を抜けて砂浜に走っていく、そして砂浜の途中でサンダルを脱ぐと地面が熱いのかぴょんぴょんと跳ねながら海のほうに走っていく。
僕は北風をここでアホだと思った。
あろうことか北風は海に走っていって・・・ダイーブッ！！
完全なアホ戦士の北風は手提げ鞄を持ったままダイブしたことに気付いていないらしかった。
「僕も完全なアホ戦士になってやるっ！！」これは誰がどう見よう

とイカれちゃった人にしか見えない。
僕も北風と同じように、そのままダイブした。
そしたら北風に「バカじゃないの？」と冷ーたく（こういうときだけ冷たい）言われたので僕は「それは北風もだろ？」と返してやった。
それから数秒の沈黙のあとには砂浜が二人の笑い声で埋め尽くされていた。
そして、いつの間にか僕の感じていた寒気は消えていた。

僕たちは夢中で遊んだ。
空が夕日で真っ赤に染まるまでいっぱい遊んだ。
「そろそろ海から出よう」僕がそういうと北風はすんなりと一緒に海から出てくれた。
僕は北風が気になってつい見てしまった。
北風は着ている物を乾かすため全て脱いで背の低い木にかけている途中だった。
僕は恥ずかしかったので「着ながら乾かす」と言って服を着たままだったのだが北風は違ったのをすっかり忘れてた。
北風の場合は「じゃあ私は脱いで乾かすから」と言って僕の視界からすぐに消えて僕の後ろの方で服を脱ぐ音が聞こえたのだったが、北風が「ねぇ」と言うから僕は「なに？」と言いながらつい振り返ってしまったのだ。
北風は後ろを向いていたから良かったものの、こっちを向いていたらと考えると恐ろしくて二度と振り向けない。
僕は振り向けないので北風に背を向けて北風のことを考えていた。
北風は僕に『大切なものを探して』と頼んできた。
でも、それはまだ見つかっていなかった。
僕は途中からそんなことはどうでも良くなっていたのだ。
北風が好きだから傍に居れるだけで嬉しくて、楽しくてしょうがなかった。

今までの僕に好きだと伝える勇気なんて無くて（最初ので使い果たした）あるのは嫌われるという不安だけだった。
でも今は伝えられそうな気が、そんな気がした。
それは早く好きだって伝えたいへと急速に変化し僕の心が好きという感情で埋め尽くされていく。
そして僕が伝えようとしたとき北風は僕に言ったのだ。
「私、明後日には居なくなるから、明日で大切なもの探しは終わるから」
「え？」僕の口からは好きって言う言葉ではなく驚きと絶望の声が出るだけだった。
僕は振り返って北風を見た。
今の北風を表す言葉は綺麗の一言で十分だった。
今なら僕にもわかる気がした。昔の芸術家たちが残した石像などを見て「美しい」と言いたくなる気持ちが、輝いているのだ他のものよりもずっと美しく優しく輝いている。
そんな北風を僕はずっと見ていたかった。
でも、それは許されなかった。
北風が僕の方へ歩いてきて僕を押し倒してこう言ったから
「明日、私を殺して・・・・・」
「・・・・・」僕は言葉を失った。
無言の僕に向かって北風はこう続けた。
「明日、午後三時にあの遊園地で待ってる。」言い終わると乾きかけの服を取りに行きそれを着て帰っていった。
僕は拒絶されるのが怖くてすぐには後を追えなかった。
でもすぐに暗くなるのは、わかっていたので急いで帰る準備をすると僕も少し前に北風が入っていった森に入っていった。

第一章の８！（後書き）

長かったでしょ～・・・

あれ？短かったかな？・・・・

と、ここでお知らせです。

第一章は残すところあと９と１０しかありません！

大変ですよ、皆さんの楽しみ（ではないかもしれません）が無くなって・・・・

しまいません。

はい、無くならないですよ～

第二章がありますからね～

だから、もうちょっと頑張ってください。

それではまた次回・・・

第一章の9！

9

夢であってほしかった。次に目が覚めたら普通の日常で学校があってまだ夏休みに入ってなくて、これから夏休みで友達とかと夏休みどこ行くかとか話し合って、それで夏休みになったら皆でバカやって、はしゃいで怪談話やエロい話とかで盛り上がってそんな日常なら良かったのに、向こうから話しかけてきて、こっちは勝手に浮かれて勝手に好きになって北風の言うことならなんでも聞いてあげたくて叶えてあげたくて必死で頑張っても、手に入ったものは『明日、私を殺して・・・・』という最悪の結末を意味する言葉だけで残ったのは好きって気持ちとこんな世界を滅ぼしてしまいたいという行き場を失ったモノたち。
そして最後の日は僕にとてもあっさりと訪れた。

最後の日の天気は雨だった。
最悪という言葉に最も合った天気だと僕は思う。
それはそうと僕は今日出来る限りのことをするつもりだ。

朝食を済ませたとき既に時計は十時を指していた。
「少し出遅れた。」僕はそう小さく呟くと急いで二階の自分の部屋へ行き準備をし始めた。
そこで来客を知らせるチャイムが鳴る。
それを無視して作業を続けようとするがチャイムがうるさくて少しペースダウン。
すると親が出たのかチャイムが鳴り止んだがすぐ二階へと上がってくる足音がする。
そして僕が良いよ、と言っていないのに足跡の主は勝手に僕の部屋

に入ってきた。
「桜、何か用？」僕が邪魔そうに言うと水谷は僕の嫌いなタイプの口調で
「何か用？じゃないわよ！昨日どこ行ってたの？言ったよね？明日は勉強やろうって」そう言った。それに対して僕は水谷の方を見て
「用はそれだけ？なら帰って、僕は忙しいから」と言ってすぐに作業に戻る。
「やだ！帰らない！今日は教えるんだ・・・ちょっと待って！」水谷は準備が終わり出かけられるようになった僕を見て慌ててそう言うと、僕の部屋の扉の前でとうせんぼをした。
「退いて」僕がそう強い口調で言っても水谷は「やだっ！」と言い退こうとしない。
「退いて」「やだっ！」「退いて」「やっ！」「退けよっ！」僕が最後に放った言葉で水谷はあっさりと両手を下ろすと扉の前から少し横にずれて僕に聞いてきた。
「純也は・・・北風が好きなの？」
僕はこの時は正直まだ迷っていたんだと思う、でも、僕は北風が好きだから答えた。
「好きだよ、僕は北風が大好きなんだ・・・だから僕は行かなきゃいけない、そして伝えるんだ。はっきりと好きってことを」そう答えた。
それが水谷を傷つける答えだったとしても何のためらいも無く答えられた。
その答えを聞いた水谷は一瞬だけ驚いた顔を見せてからすぐにその目から涙が溢れ出た。
僕は泣いている水谷を措いて僕が今、やらなくちゃいけないことをやりに家の外へと飛び出した。
僕の心が巣立ちをむかえた瞬間だった。
と、格好良く飛び出してきたものの行く場所はまだ逆神社しか決めていなかった。

とにかく決まっている場所から回って、回っている間に次に行く場所を決めれば良いと思ったので僕は逆神社へと走り出した。
逆神社に着くと両替機の横にある小さなお賽銭箱に僕は今、持っている半分のお金（五千円ほど）をジャラジャラと流し込んだ。
全て流し込むと両手を合わせて願いを籠めた。
『北風が引っ越してしまいますように』と心の中で囁く、これでおしまい。
ここでやれることはやったから次の所に向かうことにする。
向かう場所は駅前のアクセサリーショップだ。

駅前のアクセサリーショップには一度だけ来たことがあった。
そのときは北風も一緒に、というか僕が北風に連れられて来たのだけど・・・
そのアクセサリーショップの商品は全部、店長の手作りでビーズで作った指輪や銀粘土と呼ばれる粘土で作られたシルバーアクセサリーなどがあった。
そして北風はここに来たときすごく欲しそうに一つのネックレスを見ていたのだ。
僕は店に入るなり北風が欲しがっていたネックレスが置いてある棚に向かい、それを見つけると迷わず手に取りレジに持っていった。
「五千四百円です。」僕は耳を疑った。
なんてことだ。僕の財布には五千二百円しか残っていなかった。
さっきお賽銭箱に入れすぎた！と思っても今更遅い。
「すみません、足りないのでまた・・・」財布から出して数えていたお金を戻そうと手を伸ばしながら途中まで言ったところで
「何円足りないの？」後ろから女の人の声がした。
僕が振り向くとそこには綺麗な女性が居た。
僕が見とれていると女の人はまた「何円足りないの？」と聞いてきた。

慌てて僕は答えた。
「あっ！えっと？・・・ちょうど二百円です・・けど・・・」
それを聞いた女の人は店員に「これ二百円割引ね～」と言ってから僕の耳元で囁いた。
「告白、がんばれ！」その一言を僕の耳に残して、その女の人は店の奥に引っ込んでしまった。
「あー店長また割引して～潰れますよ。この店」と店員がこの店の店長らしき人にそう言うと僕のほうを向いて「あっ！気にしないでくださいね。店長って客のフリして本当の客を観察して気に入ったカップルとかを見つけると割引するのね～それはそうと五千二百円です。」そう言われた僕は慌てて支払いを済ませて品物を受け取ると僕はすぐに店を出る。
外に出るとお昼時だからか、それともここが駅前だからかは分からないが人込みが既にそこに出来ていたのだ。
問題は僕にはお金が全く無く、昼飯を買うことが出来ないので三時まではあと二時間半ほどあるが何をして過ごせば良いのか分からなかった。
これは困る。
非常に困るのだ。
僕が完全に行き詰まっていると助けが来た。最高のタイミングで
「お～い！須藤～」と遠くで傘を片手に持ちながら、もう片方の手を大きく振っているバカ（友人）がノリノリでこっちに近づいてくる。
いつもは少々ウザく感じるが今の僕からは全然そんな邪念は吹出しておらず、むしろ助かったぜ！お前は最高の友だ！という友情（？）のオーラが出てきつつあった。
まぁ期待はすぐに裏切られた。
僕は友人の運の悪さをお腹が空いてたせいで計算にねじ込むのを忘れていたのだ。
そう友人は僕を目の前にして段差に躓きこけた。

その時に友人の財布の中身は全部、下水道に吸い込まれてしまった。
友情（？）オーラはすぐに僕の中に納まり代わりにドス黒いオーラが僕を包んだ。
さよなら僕の昼飯〜
さよなら僕の安らぎ〜
こうして僕は空腹に耐えながら雨が止みかけてきた中を一人で遊園地を目指して歩き出した。

遊園地に着く頃には雨は止んでおり夏の太陽が僕に暑さと紫外線を放っていた。
そんな暑い中、待つこと約二時間が過ぎ三時ちょうど僕の目の前にはいつもと変わらず白いワンピース姿の北風が立っていた。
「はい、これ」と言って北風は僕にチケットを差し出した。
僕が「ありがとう」と素直にお礼を言ってチケットを受け取ると北風は「ルルルル」とチャネリングをしてから
「じゃあ、行こっか・・・」北風はすこし寂しそうにそう言って僕と一緒に遊園地へ入っていった。

遊園地に入ると僕は北風のあとについて歩いた。
北風が向かった場所はジェットコースターでもなければお化け屋敷でもなかった。

巨大観覧車だった。

そして待ち時間は二時間、たぶんこれが最後のチャンス。
この時、僕は観覧車の中で告白しようと決めた。
待ち時間はお腹が空いているからなのか長く感じられた。
長い待ち時間を僕たちはお互いに何にも喋らず待っていた。
僕は待ち時間の間ずっと考え事をして過ごしていた。
結局、北風の大切な物って何だったんだろう？今日ここで見つかる

のだろうか？北風は普段はどんな服を着ているのだろうか？今と同じワンピース系だろうか？それともTシャツにジーパンという格好だろうか？北風の好きな食べ物って何だろう？カレーだろうか？女の子だから甘いデザート系だろうか？それとも納豆とかだろうか？とか知りたいことが山ほどあった。
そういうことを考えているうちに時間はやって来てしまった。
まずは北風から乗り込み、そのあとから僕が乗り込んだ。
そしてドアが閉まると同時に北風は口を開いた。
「ねぇ天使の観覧車って知ってる？」
「天使の観覧車？知らないけど・・・」僕は何のことだかさっぱりわからなかった。
「じゃあ時間が無いから簡単に説明する。この町には天使の観覧車っていうのがあってね。それに乗った男女は嫌でも結ばれてしまうの天使の勘違いで」
僕は迷惑な天使だな～と思いながらも続きを聞いた。
「天使が間違えちゃうのも無理ないの、その天使の観覧車って一周するのにかかる時間が二十分なの、だから男女のペアで乗っているところを天使が見たら天使はその二人がカップルって思って赤い糸を結びつけちゃうの、だから最近は天使たちがこっちへ降りてきてちゃんとその関係が運命の出会いから生まれたかを確かめてから赤い糸を結ぶって決まりになったの」その話を聞いていて僕は気がついた。
「もしかして天使の観覧車って僕たちが今乗ってる・・・これ？」
気付いてしまった自分が嫌になる。
なぜならそれは僕の北風を好きだっていう気持ちが嘘かもしれないから。
そうなのかどうかは北風に聞いてみるしかないけど今は北風の話に集中する。
「そうよ。今、私たちが乗っている観覧車が天使の観覧車・・・あぁ半分まで来ちゃった。」北風が寂しそうに言った。

「私ね、ここが一番上まできたら・・・天界に帰るの」
「帰っちゃう・・・・のか？」
「うん、それでね、私が帰ってから三時間でみんなの記憶からも消えちゃうの・・私」僕から見た北風は帰るのが辛そうに見えた。
だから僕はこの時に渡そうと思った。
本当は告白のときに渡そうと思っていたけど、渡すときは今しかないそう思ったら体がかってに動いていた。
僕はウエストポーチからさっき買ったばかりのネックレスを北風に手渡した。
それを受け取った北風は嬉しそうに笑みを浮かべながら僕に「ありがとう」と言ってからそのネックレスを早速身に付けた。
そして北風が僕のほうを見た瞬間、僕は北風を強く抱き締めた。
それから僕は僕の心の中にある言葉を見つけ出し言葉にした。
暗闇の中でも見失うことなく輝き続けるその言葉を・・・
「僕は、僕は北風が、氷柱が好きだから、大好きだから何処かへ行ってしまうのは嫌なんだ！僕は絶対に氷柱を忘れない。だから、僕と付き合ってください。」ハッキリと僕の気持ちを伝えた。
言ってみると案外簡単なものなんだなと思ってしまう。
そう、想いを伝えるのって本当はすごく簡単なことで、ただ「好き」と言えば想いは伝わる、そのことに気付けないで悩んで苦しんで諦めてしまうのは勿体なかった。
だから僕は伝えた。
たとえどんな答えが返ってこようと僕は後悔はしない。
ちゃんと伝えたから「好き」っていう気持ちを
「私もっ！私も純也が」そこで北風の言葉は途切れた。
夕日が小さな密室空間をオレンジ色で染めていた。
僕は一人で窓の外の景色を眺めていた。
なんだか心にぽっかりと穴が開いた感じがした。
僕の日常から何か大切なものが抜け落ちたようなそんな感じがその時した。

第一章の９！（後書き）

えっと、次で第一章が終わります。
そして第一章の最後は短いです。
本当に短いです。
この部分いるのか？ってくらい短いです。
ですので読まなくても、いいですが
読まないと第二章でわからない部分があるかもしれませんよ。（何を書いたか既に忘れかけてるから・・・）
それでは第一章の１０！で。

第一章の１０！（前書き）

いよいよ最後の数字です。
短いですがお楽しみください。

第一章の１０！

１０

北風が居たという記憶は北風が消えてから三時間で消える。
僕が家に着いたときには既に残りは約一時間になっていた。
純也は北風のことを忘れないように自分の部屋に油性マジックで「北風氷柱」と書いた。
部屋の壁、机、北風に貰った新型のゲーム機、パソコン、本、漫画、書けるだけ書いた。
そしてタイムリミットが来るまで僕は携帯のボイスレコーダーに北風の知ってること全部を録音しようとした。
このとき既にタイムリミットはすぐそこまで迫っていたのだ。
北風のことを結構言ったあとで
「僕は北風氷柱が好きだ」まで言って北風と過ごした夏の思い出が消えた。
北風のことを忘れてしまっていた。
「あれ？なんでボイスレコーダー機能使ってんだっけ？」そう言いながら大切な記憶を失った僕は北風のことを録音したデータを保存せずに消した。
今度は部屋に書かれている無数の文字を見て
「うわっ！・・・ん？きたかぜ・・・ひょう・・ちゅう？なんだこれ？気持ち悪っ！」そう言うと片っ端から文字を消していった。
だけど消すたびに心が苦しくなるのはなぜだろう？一文字消すたびに心に出来た穴が広がっていくような感じがした。
文字を消す僕の手が止まった。
「きたかぜ・・・つらら？」ふと僕の頭の中に浮かんだ言葉だった。
「誰だろう？いやいや、どうでも良いから早く消して夕飯食おう！」
そう言って僕は大切な人の名前を次々と消していった。

第一章の１０！（後書き）

さてさて第一章が終わってしまいました。
次は第二章です。
ただ第二章で最後です。
たぶん面白いです。
第一章より笑えます。
そして氷柱ってこんなキャラだったっけ？ってなります。
まぁ期待しないで待ってれば、すぐに一週間経つことでしょう。
それでは第二章で・・・あえるかな？

第二章の1！

第二章　夏ふたり

1

私の名前は北風氷柱（きたかぜつらら）、歳は十六歳で高校二年生らしい・・・。
確かに私が生まれてから十六年の月日が経てば私の歳も必然的に十六になるだろう。
だか、私は人間とはすこし、いや、かなり違っていた。
私は生まれたときからこの姿だし、まず死なないというか死ねない。
なぜなら私が天使だからだ。
しかもただの天使なんかではない、恋愛天使なのだ！
私の所属しているのは天界第二区域十四番管理所の恋愛天使の観覧車という場所だ。
そこで私は恋愛天使長をやっていた。
なぜ過去形かと言うと部下に実力の差を見せ付けてやる！とか変なことを考えた私が誤って人間界に落っこちてしまったからだ。
それからの日々は大変だった。
一度人間界に落ちた天使はそれから半年を人間界で人間として過ごさなければいけなかった。
半年たてば恋愛天使の観覧車から天界に帰ることが出来る。そして人間界で関わった人間は私のことを私は人間のことを忘れてしまうのだが私はまずは学校に通うべく校長その他の記憶を改ざんして去年から私が学校へ通っていることにした。
それからの日々は本当につまらないものだった、彼に会うまでは。
そう学校に通い始めて三ヶ月が経ったある日、私は彼に一目惚れをしてしまった。
普通なら「恋愛天使なるもの一目惚れなどと言う邪道な恋愛意識を

持ってはならん！」と言うはずなのだが、この時ばかりはそうも言ってられなかった。
私は彼の笑顔を見た途端、あまり無い胸に矢が突き刺さった。
クッションのような柔らかさのものが無いためか矢は思った以上に深く刺さり抜けず、その時に私はこれが恋の矢のだと気付いた。
気付いたときにはどんなことでも手遅れな場合が多くて、つまり私はすでに恋に落ちていた。それが禁断の恋だと知っていてもなお私は彼に惹かれていった。
「恋愛天使なるもの恋愛は見守るものでありするものではない！」
この言葉は恋愛天使が生まれてすぐに聞かされる言葉だ。
正直嫌って程、聞かされていたのでわかっていたつもりなのだが、どうやら恋というのはいつも予測不可能なものらしい。
私が恋をしてから二ヶ月と半分ちょっとたったある日、私は遊園地で遊んでいた隣を歩いている須藤純也、私の想い人と共に。
そして私の想い人はなにやら疲れているようだった。私が
「大丈夫？」と聞いても彼は
「だ、大丈夫・・・」と答えるだけでそのあとは何にも喋らなくなってしまった。
だから私は最後くらいはじぇっとこーすたーという乗り物に乗るのを止めて、元私が所属していた恋愛天使の観覧車に乗ることにしたのだ。

待ち時間のときの彼は少し元気だった。
私がそう思ったのは彼はなにやら考え事をしながら私相手に新型のゲーム機がどうのこうのと喋くっていたからだ。
まぁ器用というか不器用というか人によって意見が分かれそうだな〜とか思っているうちに観覧車の密室空間が目の前まで来ていた。
そして私と彼は密室空間に閉じ込められて天高くへと上っていく、私と彼は椅子に座ることはしなかった。
彼が何を考えてるのかわからないが私はふと思った、ここで彼に告

白しちゃおうと。
前にも一回彼に告白しようとして結局、嘘をついてしまったことがあった。
そのときはたしか補習帰りで私が彼を呼び止めて人気の無い公園に連れてった。
そこで告白しようとして止めた。
どうせ付き合えたとしてもすぐに私たちはお互いのことを忘れてしまうのだ。
それならとその時、私は思いついたことを彼に言った。
「一緒に大切なものを探して！」まぁ嘘は吐いてない、大切なものとは彼との思い出だったのだから。
それから私は毎日のように彼との思い出作りに励んでいるのだった。
だけど今回は思わぬ妨害が入ってしまったが為にまたもや失敗してしまった。
その妨害の正体は私が昨日、今日のことが楽しみで眠れなかったことによる睡魔のだった。
私は勇敢にも睡魔に立ち向かったのだが、私は立ったまま睡魔に敗れてしまった。
そして私を深い眠りから目覚めさせたのは彼の
「なんで聞いてないんだよっ！」という大声だった。
その時、私はその大声に驚いて思いっ切り彼を蹴ってしまった。
まぁ不可抗力ということで良いかな？　良いということにして、そのあと二人は無言で密室空間から出ると遊園地をあとにして、それぞれの帰路に着いたのだった。

第二章の１！（後書き）

ついに第二章が始まりました。
そして今回の後書きはここで終わります。

ってことは、ないです。
えっとですね。
第二章のほうが面白いと思います。
第一章よりも笑いにこだわりましたので・・・
それでは後書き終わります。

第二章の２！（前書き）

えっと、忘れていて遅くなりましたがお楽しみください。

第二章の2！

2

それから二日間は彼が補習に来ないせいで会えず、つまらない補習は私一人が受けた。
そして遊園地に行ってから三日目の昼前、須藤純也の幼馴染の水谷桜から私の恋愛天使専用のハートに羽が生えたデザインの携帯電話にメールが来た。
内容は十二時に駅前のファーストフード店で待ってる。とファーストフード店が何なのかを説明するための長ったらしい文章だった。
このメールで私はおかしな点を三つ見つけた。
一つ目はまずありえない、人間に天界文字がわかるわけが無いからだ。
二つ目は天使が人間界のことに詳しくないってことを知っているから。
三つ目はこの携帯電話にメールを送るには相手も同じ携帯電話を持っていなければならないから、つまり水谷桜は恋愛天使にかかわりがあり、なおかつその恋愛天使と仲が良い、もしくは結ばれている。
そうじゃなければ、これを人間に渡すわけが無いし、それに使い方だって分からないはずだからだ。
もしくは自らが天使っていう線も・・・・
私がそんな考え事をしながら歩いているといつの間にか駅前のファーストフード店の前に居ることに気づいた。

店に入った私はまずあいすこーひーを頼む、会計を済ませてそれを受け取ると二階席へと向かった。
なぜ迷わず二階席へ向かったかというと、それは・・・・アホの子の勘がそう言っていたからだった。

二階に着くなり私は水谷桜をすぐに見つけた。
さすがアホの子の勘、略して・・・アホカン！すっごいカッコ悪い。
私はそんな思考からすぐに離れると水谷桜に聞いた。
「それ三個くらい貰っても良い？」水谷桜の目の前に置かれているハンバーガーを指差して、そしたら水谷桜は「あげない」と冷たい一言で返してきた。
それから水谷桜は食べかけのハンバーガーを置いてから私に
「あなた恋愛天使でしょ？」そう聞いてきたのだ。
私は少し迷ったが予想はしていたことなのですぐに答えることが出来た。
「うん、そうだけどなぜ人間のあなたが？」そう聞き返すと水谷桜は恥ずかしそうに、でも迷うことなくこう言った。
「わ、私のお、お、夫が天使だからよっ！」
「夫ぉぉぉぉぉぉ！」私は遊園地でジェットコースターに乗ったときよりも叫ぶものだから、お昼時のファーストフード店の二階の客全員の視線を私たち二人は浴びることとなった。
私は平気だったが水谷桜は顔を真っ赤にして
「ほ、ほら、い、行くわよ！」そう言うと水谷桜は私の腕を力強く掴むと山積みにされたハンバーガーを置いて足早に店をあとにした。

店を後にした私たち二人は今、近くの公園のベンチに座って少し休んだところで水谷桜が頬をピンクに染めた状態で聞いてきた。
「あ、う、恋愛天使の北風霧夜はあなたの兄？」
私はその名前が出てくるとは思っていなかったのでかなり驚いた。
なぜ人間界に来てもあの銀髪でかっこよくて女天使の誰もが一度は好きになると言う完璧な兄の名が聞けるとはすごく以外だった。
「うん、そうだけど・・・もしかして」この時点である程度予想は付いていた。
「そう、あなたの思っているとおり・・・き、北風霧夜が私のお、お、夫よ！」

やっぱりそうか～あの兄から前に聞いたことがあったのだ。

あれは兄が「天界の女天使、百人フッたぜ！」と言ったときに
「なんでお兄ちゃんはみんなフッちゃうの？今日の子はすぅぅぅっごく可愛かったのに～」と聞いたときに教えてくれたのだが
「俺には大切な人が居るんだ。俺がまだ天使の端くれだったときに一度だけ人間界に落ちたことがあるんだ。そのときに翼を折ってしまってな、そんな俺を助けてくれた人が居た。その人はまだ小学生とやらだったらしいんだが、しっかりしていてそして発育が良かった！」その最後の言葉を聞いた瞬間、私は兄をおもいっきりちょきで殴った。
まぁ殴られて当然の発言をした兄への天使から天使へ下される天罰だと思えばいいだろう・・・たぶん。
私に殴られた兄は十メートルくらい吹っ飛んで「○△□※！」とあのかっこよさからは想像も出来ない叫び声をあげた。
それから少し経って何事もなかったかのように
「さて続きを話そうか、えっと・・・発育が・・・・ち、違うぞ！えっと・・・・頭が良くってわけでもなく～えっと・・・・そうだ！会いに行こう！」
「それって忘れたってこと？」私がそう聞くと兄は
「そうとも言う！」そう断言した。
「そうとしか言わないから・・・・たぶん」私は断言できなかった。
私と兄ではそういうところが違かった、と今はそんなことはどうでも良い。
「それでその子と約束でもしたの？十年後ここでまた会おう！とか言ったの？」私は適当に言ったつもりだったがどうやら図星だったらしかった。
なぜなら兄の反応が「な、なぜそれを？さては俺の部屋の机の中をあさったな！彼女との思い出の詰まったあの・・・」
「あの？」

「あのエロ本を」
またあの兄の奇怪な叫び声が天界に響いたことは言わなくてもわかるだろう。
だが今回は手加減して地面（といっても雲だけど）に天使型の穴を開けるだけにしといた。
その穴のそこから力なき声で「冗談・・・だ」と兄が答えたのは言うまでもないかもしれない。
あとでちゃんと埋めておかなきゃ、という冗談は置いといて約束はしたらしかった、しかも十年後会おうという約束を・・・。

私が一気に喋りぬくと水谷桜は少し微笑んで
「やっぱり変わってない、霧夜は人を笑わすことが好きだったから、私なんていつも笑っていたの」彼女が兄のことを話すときの顔は本当に幸せそうな顔している。
見ててすぐにわかる、この人は本当に兄のことが好きなんだなって
「それでね、彼とのお別れのときに私、彼と約束したの十年後ここで会おうって、それで彼はもう一つ面白いことを言った。十年後にここで会うまで男にはツンツンしててくれってだから私はじゃあちゃんとツンツンしていたらキスしてねって・・・言った・・・・の」
説明し終えた彼女はまた顔を真っ赤にして、さらに今度は特典として無言になってしまった。
無言という特典をもらった私はもうここに居ても仕方がないと思い、この場所を去ろうとした。
そのとき「待って」と言う余りにも早すぎる無言タイムの終了の合図を聞いた私は、既に背を向けていた水谷桜の方を振り返った。
「ねぇ今日逆神社でお祭りがあるの、あなた行ってみたら？ヒントは新型のゲーム機、じゃあね～」私が振り返ったと同時に彼女はさっきまで恥ずかしそうにしていた人と同一人物なのか？と一瞬疑うくらい冷たい目でこちらを見ながらそう言いその場から立ち去った。

第二章の3！（前書き）

えっとまた忘れてしまいましたが、今回は面白いですよ～・・・・・・
たぶん・・・
一回くらいは笑う・・・はず

第二章の3！

3

私が逆神社に着いたときはまだ始まってすぐだったらしく人があんまり居なかった。
とにかくさっき貰ったヒントを有効活用しなければと思い頭の中で整理してみた。
新型のゲーム機　↓　遊園地で純也が喋くっていた　↓　純也が欲しいもの　↓　絶対に手に入れる！となった。
これで目的は決まった。
今日はお祭りでゲーム機を手に入れる！と考えては見たもののどうやって手に入れるのかが問題だった。
周りを見渡せば、しゃてきに三角くじ、紐引きにクレーンゲーム・・・クレーンゲーム？
まぁ片っ端からやってけば手に入るだろう、そう思った私はお祭りという名の戦争を甘く見ていた。
そうお祭りは客と店の戦争、戦場では殺るか殺られるかの戦い。
お祭りもそれと同じ、取るか取られるかの・・・戦いだ。
そんなことを考えている時間が勿体ないのでさっさと銃撃戦場（しゃてき）の場所まで兵士（親子連れなど）を避けながら向かった。

しゃてきというのは本当に戦争だった。
小学生くらいの子供たちが「落ちろ！落ちろ！」と受験生に対しては絶対に言ってはならない言葉を吐き散らしながら、敵兵（景品）を打ち落とそうとしている。
子供たちが狙う敵兵は大物の大佐クラスの奴ばかりで落ちる気配が全く無い。
とにかくここに目当てのものがあるか確認するため敵のトップのお

じちゃんに
「すみません、この中に新型のゲーム機ってありますか？」そう私は聞いた。
「あーこの真ん中にあるこれが最近出たゲーム機だね」敵のトップでありながら丁寧に答えてくれた。
なんと優しい敵のトップなのだろうか、尊敬に値する人だ～と考えた自分がお馬鹿だ！
そう思うのはそう長くはかからなかった。
十発・・・それは三百円の銃撃戦（しゃてき）では多いくらいなのに・・・
「なぜ落ちないの？」
そう私は全弾を命中させた。
なのに新型戦闘機（新型ゲーム機）は倒せ（落ち）なかった。
「これは私には向かない・・・」と呟きながら銃を置き銃撃戦場から離れた。
このときに私は始めてお祭りの恐ろしさを知った。
兵士（親子連れなど）がさっきの数十倍・・・くらいの数に増えていたのだ。
その軍隊を私はするりするりと避けながら運を味方につけても絶対に勝てないギャンブル（三角くじ）の行われている場所へと向かったのだった。

賭博（じゃない）場場所に着くとさっきと同じように
「すみません、この中に新型のゲーム機ってありますか？」と今度はおばちゃんに聞いた。
するとおばちゃんの目がギラリと光った・・・気がした。
「え～とこれがそうじゃなかったかしら」と言ってさっきとは違う色の新型ゲーム機を紹介してくれた。
なるほど色違いもあるのか、それで全ての色を集めて応募すると何かが貰えるしくみなんだ！やっと理解できた。
理解（？）した私はディーラー（おばちゃん）にチップ三枚（三百

円）を渡してからカード（くじ）を引く。
そして出てきたのは・・・
一等だった。
おばちゃんは驚いて目を見開く、そして手に持っていたベルを慌てて鳴らすと
「お、大当たりー！」と大きな声で周りの兵士（親子連れなど）たちに伝えたのだった。
そしてついに念願の新型ゲーム機が・・・
「はい、これが一等の今人気のホラー映画のチケット十人分と遊園地の一日パスを二人分」
手に入らなかった。
なぜなの？なんで手に入らないの？と景品の置いてある棚を見ると新型のゲーム機は二等の棚にあった。
じゃあもう一度やればと思い私が並ぼうとしたとき、おばちゃんが本日二回目の鐘を鳴らして兵士にこう伝えた。
「二等！二等も出たよー！」
それはここも終わったことを告げていた。
「私って運が悪かったのね・・・」私はそう呟くと列に並ぶのを止め、今度こそ取るという思いを胸に秘め次の戦場に向かうことにした。

次は・・・帯・・・いや紐引きだ。
帯だと確か「あ～れ～おだいかんさま～」とかいう遊びになるはずだ。
昔、兄に教わったことだがこんなときに思い出すとはなんか嫌、と言うのも昔、まだ何も知らなかった私が兄とやった遊びがそれだったのだ。
その遊びの楽しさはわからないが恥ずかしさだけはその時たっぷり味わったのでわかっていた。
帯の話はそれくらいにして、紐引き場に兵士（親子連れなど）を避

けながらやっとのことで辿り着くと空には既に月が見えた。
まだ明るいのになぁ、と一旦和んだところで戦闘開始！
今回の戦いは学校で皆が体操着で行う戦争内で使われる綱引きに似ていた。
敵と見方が紐を選んで引っ張り合いをする、それが紐引き！
私は景品の中に宿敵の新型ゲーム機を見つけると早速列に並ぶ。
早く番がこないかな～♪などと鼻歌交じりで歌いそうになるのを堪えながら待っていると自分の番が次にまで迫っていた。
私の前にいる小さな兵士（男の子）がどこぞの特撮ヒーローの赤色の人形を持って喜びながら親の元へ走っていくと、ついに私の番が来た。
私はさっきからずっと握り締めていた三百円を今度は優しそうな、おねえさんに渡すと慎重に紐を選び始めた。
慎重に選ぼうと思っていたわりに早くに選び終えてしまった私は、自分の運はさっきのギャンブルで信じられなくなったのばかりなので、今度は勘に頼ることにしたのだ。
そして選んだ紐を引く、すると新型ゲーム機の箱が動いた・・・だけだった。
結局取れたのはゲーム機ではなく、私の前の小さな兵士が取っていった、どこぞの特撮ヒーローの今度は黄色の人形だったが、それを私は手に入れてしまった。
「私って勘も外れる天使だったの・・・」戦隊物では何かと影の薄い黄色の人形を手に私はそう呟くともう元気の残ってない体で最後の戦場へとトボトボと向かった。

最後のクレーン戦争で決着をつけようと私は思った。
まぁどっかで聞いた事のある名前だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。
クレーン戦争は一回が百円で難しさによって台が違うので新型ゲーム機が一番入ってそうな難しいクラスに私はイキナリ挑戦しようと、

とても短い列に並んだ。
私は並んでいる間に貰った紙に書いてある説明を読むことにした。
クレーンゲームは難易度が三段階で簡単なのが手の形、普通が三本指のアーム、難しいのが一つの指の先に吸盤で全部景品がカプセルの中のチケットと交換でカプセル内に錘が入っており難しい！でも難しいには新型ゲーム機の他にソフトなどもあるから、みんなゲットしてくれよな！とすごい元気のなさそうな文字たちが筆で黄色い紙に書かれていた。
私が紙に書いてあること全部に目を通すころに順番が回ってきた。
まずは百円を入れる、それからレバーを前に倒しアーム（吸盤付の棒）を前に進め適当なところで止める。
今度はレバーを横に倒してアームを横に進めカプセルの真上に持ってきたところでレバーから手を離す。
アーム（吸盤付の棒）が下りていきカプセルを吸着！そのまま引き上げ私のほうへと戻ってくる。
あと二十センチで穴に落ちるってところでカプセルが落ちてしまった。
だがこのクレーンゲームはあと一回だけチャンスがある。
もう一回に全てを賭けるしかない、そう思った私は気合を入れるためチャネリングをする。
「ルルルルルルルルル♪」
いつもの倍、ルと言ったからきっと出来るはずだ。
そして私はレバーを握り最終決戦に挑んだ。
もう一度レバーを前に倒し前に進めてカプセルの上で止める。
それからレバーを横に少しだけ倒しすぐに手を離すと運任せのゲームへと突入した。
アーム（吸盤付の棒）がカプセルを取った、あとは穴まで持ってくるだけアームが揺れる。
私は心の中で落ちろ！落ちろ！と必死に念じていた。
ここは逆神社だからお願いごとは逆のことを・・・

ついに私の前にある穴にカプセルが落ちた。
こうしてクレーン戦争は私の勝利で幕を閉じた・・・はずだった。
景品を交換した私はクレーンゲームの魅力に惹かれまくっていた。
簡単なやつのぬいぐるみを全部取ったときには私の周りにはぬいぐるみのたくさん詰まった紙袋が何個かあり空の紙袋も二十枚近くあった。
そんな時に後ろから
「あの北風？」そう私の名前を呼ぶ須藤純也が居た。
私は驚いてポカンとした顔で彼の顔を見つめてしまう。
そして慌てて口から出た言葉が
「あっ！須藤くん・・・だっけ？」だったのは失敗だったと思う。
実際に失敗だったのだ、また彼の叫び声を聞くことになったのだから

「忘れてただけかっーー！！」

その叫びは周りの人全員を私たちの方に振り向かせるほどの大声で放たれて私のか弱い耳に届いた。
周りからの視線攻撃に耐えられなくなってきたのか、彼は私の手と私の取ったぬいぐるみの詰まっている紙袋をしっかりと掴むとその場から離れて近くの誰も使わなさそうな小さな公園（ほとんど広場）に走って逃げ込むと彼は私と紙袋を放す。走ったせいで汗だくの私はぬいぐるみ達と共にその場に寝転がった。
ちなみにぬいぐるみは紙袋から零れ落ちてその辺に転がった。
「北風・・・ごめん、疲れた？なにか飲み物買ってこようか？ラムネで良い？ちょっと待っててて買ってくるから！」寝転がっている私を見ながら焦って自分ひとりで話しを進めて飲み物を買いに行こうとした彼を
私は今にも泣きそうになりながら寝転がった状態のまま彼の足を両手で強く掴んで
「いやっ！行かないでっ！どこにも行か・・・ないで・・・・・よ」

そう弱々しく叫んだ。
その時、彼に会えてホッとしている自分が居ることに私は気付いた。
だからすぐに私は手から力を抜きあっさりと彼の足を解放した。
そのあと私は泣いてしまった。
私の心のどこかで彼に会いたいって思いが疼いていたのだろう、お祭りでゲーム機を取ろうとしている間ずっと。
なんか彼に申し訳なく思った私は彼の手を両手で包むように握って「ごめんね、止めて」そう言うと立ち上がって彼に抱きついた。
彼の顔は一瞬で真っ赤になってしまった。
でも彼はすぐに私を突き飛ばして、その場に崩れ落ちてしまった。
私は何とかその不意打ち攻撃を耐え抜いた。
そこから先は彼とのお喋りで過ごしてしまい、お祭りの最後にやる花火が近づいていた。
私たちが居る公園の周りも騒がしくなったあたりで花火が夜空を彩る。
私はこの花火で彼に教えてあげるつもりだった。
私が探している大切なものの正体を教えるつもりだったのに、なんと彼は花火が始まってから「た～まや～♪」という歓声が上がるまで私のことをチラチラと見ていて花火で書かれた言葉を見ていなかった。
だから私は彼の気を引こうと
「ありがとう、一緒に居てくれて、お礼あげるから・・・」といいながら私はぬいぐるみの詰まった紙袋の底をあさり始め、あさること十秒たちやっとお目当ての物を取り出した私は、頑張って取った新型ゲーム機を彼に渡した。
「えっ？いや、あの・・・貰って良いの？」と彼が遠慮しながらもそう言うので、欲しがっているのがよく分かって面白かった。
それで私は彼を許そうと思った・・・一瞬だけ。
彼は新品の新型の携帯ゲーム機の入った箱を手に取るとすごく嬉しそうな顔で

「ありがとう！」と言うと私をその場に措いて走って行ってしまった。

その時、私の心に彼を怖がらせるという思いが生まれた。

次の日、朝早くに彼の家の郵便受けに手紙を入れておいた。

措いていった罰の言葉と今日の午前十時に隣町の駅に来てと書かれた紙とギャンブル（三角くじ）で当てた。ホラー映画のチケットが入った恐怖の手紙というやつだ。

第二章の３！（後書き）

笑っていただけましたでしょうか？
笑えた人も笑えなかった人も、暇そうに次を待っていてください。

第二章の４！

４

私の計画は前日の夜、つまりお祭りが終わったあと既に動き始めていた。
まず思いついた須藤純也を怖がらせる、をどうやって実行に移すかだが、それもすぐに思いついた。
確か私の記憶が正しければ去年の春ごろにくっ付けることに成功した超が付くほどの歳の差カップルが居たはずだ。
なんとその歳の差・・・九十二歳！
普通はありえない、赤ちゃんとお爺さんが結婚しない限りこんな歳の差生まれやしない。
だったらなぜこんな歳の差が生まれたかは全部を語ると長くなるから、重要な部分の殆どを省いて語ろう。
昔々それは美しいお姫様が居ました。そのお姫様は死にました。
省きすぎだが気にしない、気にしない。
お姫様は死んだのが二十一の時だったので、この世に未練がありすぎて困るくらいの人でした。幽霊でした。
まず一つ目の未練はなんとなく嫌いだった織田信長を殺してみたいな～的な暇つぶしくらいのことでしたが明智光秀の体を意図も簡単に一時的に乗っ取り焼き殺しました。
そして後日、明智光秀から抜けました。すると姫が抜けたことにより狂ってしまった明智光秀は味方に「く、狂ってしまった奴が仲間とかで良いのか！」と言われすぐに殺されてしまいました。
そんな可愛そうな明智光秀に姫は救いの手を差し伸べました。
「明智光秀、貴様！私と旅に出ようぞ！」
狂いながら死んでしまった明智光秀は死んでもなお狂っており
「は、はいぃご主人様ぁどこまでも付いていきますぅ・・・うへへへ

ぐふふ」と完璧にドMとなってしまった明智光秀は姫の仲間（下僕）になることをあっさりと了承すると、姫から新しい名を貰った。
「下僕ナンバー一番！あなたは今日から光子よ！」と女につけるような名前を与えた。
「ご主人様ぁ～叩いてぇ縛ってぇお願いぃ」こうして姫とドMの冒険の旅が幕をあける。
わけが無かったのだ。
姫とドMの冒険は始まってたった三秒で終わった。
なぜそんな早くに冒険が終わったかも説明すると長いから語ることは無い。
あれこれあって七十年くらい経ったある日の天界第二十四区幽霊保管施設の第四ブロックで事件は起こった。
それはいつものように姫が下僕調教を行っていた時だった。
「ほら！そこの下僕ナンバー二百五十番、ヒナオ！もっと優しく舐めなさい！下僕ナンバー四番、宝泉武（ほうせんぶ）が嫌がっているじゃない！足はそっと踵部分を左手で軽く持って右手で土踏まずの部分を相手がくすぐったくないように手を密着させながら持ってそれから爪を舐めて次に指と指の間を、そして最後に足の裏を舐めて、って何回言ったらわかるの？下僕ナンバー一番、光子しか完璧に出来ないってどういうことよ！」と怒鳴り散らしていると、その日ここに来る予定の下僕ナンバー五百二番が到着した。
姫はいつもと同じように
「早く私の前まで来なさい下僕ナンバー五百二番！」そう言い放つと下僕ナンバー五百二番は付けているガラスで出来た仮面を取るなり
「この僕を下僕と言って良いのは姫様だ・・・け・・・・・姫様！ご無事でしたか！」そう姫に言った。
どうやら仮面の下僕は自分の姫を守っていたのだが、ある日姫が禁忌のゲームをやってしまったことにより異次元空間に引きずり込まれたのだと言った。
そして仮面の下僕はどうやら姫を自分の姫と間違えているらしく・・

・勘違いから始まるラブコメディっていう展開がこのあと繰り広げられ、めでたく二人は一人の恋愛天使によって結ばれましたとさ、おしまい！

幽霊の二人を結んだ恋愛天使は私、北風氷柱。
驚かすのに必要な人材は姫の下僕を使わせてもらおうとしているのだが、肝心の姫が今どこにいるのかわからない。
どこかの幽霊屋台で飲んでいてくれると良いんだけどな～などと思いながら歩いていると幽霊屋台で姫の姿とついでに下僕ナンバー一番を見つけた。
私は急いで姫に駆け寄り挨拶をする。
「こんばんは、私の大切な人ぉ」
酔っていた。めちゃくちゃ酔っていた。私を夫と間違えるほど酔っていたのだ。
これはチャンスとばかりに私は姫に下僕を三十人ほど貸して欲しいと言うと酒臭い息を吐きながら
「いいわやぁ～あなたのお願いなら、ひっく、何でも聞いちゃうぅ、ひっく」とあっさり了承してくれた。
これで人材確保完了！あとは場所の確保だけど・・・
「えーっと、おじさん！この辺で古くて森の中にある映画館って無い？」と期待せずに聞いてみると意外な答えが返ってきた。
「あー確か隣町に親子の幽霊がやってる映画館があったはずだけど・・・」
「えっ！おじさん、本当？」
「本当、本当」
なんかあっさり人材と場所を確保できたし明日の朝一で彼に手紙を渡すだけとなったわけで今日は帰って寝て明日になるのを待つとしますか！とこれが前日そして今は待ってます。
彼が来るのをかれこれ一時間待っています。
約束の時間を既に三十分オーバーしています。

私が頭の中で須藤純也を拷問に掛けていると、噂をすればという感じで三十分遅れの彼のご到着です。
「遅い！」と言った私だったが、この暑さで怒る気力も体力も残っておらず、彼の遅れた言い訳を聞き流し幽霊たちに今からそっちに向かうことを「ルルルルル♪」とチャネリングして伝えると彼を連れて映画館に向かった。

映画を終わって明かりが付いたときに私は目を覚ました。どうやら途中で寝てしまったようだ。昨日遅くまで起きていたせいだろうと思いながら目を擦って彼の方を見ると、彼は私の顔を少しニヤけながら見つめていた。
気持ち悪っ！と思いつつも心の奥底から好きが溢れ出し、埋め尽くしてしまう。こんな気持ちになるのは彼と出会ってから何度目だろうか？一々そんなことを数えている暇など無い私にはわからないことだが、そんなことは今の私にはどうでも良いことだった。
彼は立ち上がると私の手を掴み、この朽ちた映画館からすぐに出たいと言う感じで劇場を出た。
朽ちた映画館を出るとそこは来たときと変わらない森の中で相変わらず夏の日差しが私たちの水分と体力を見る見るうちに奪っていった。
それから森を少し彷徨った後、誰も居ない砂浜に辿り着いた。
私は思わず彼の横を抜けて海の方へ走っていきながら器用にサンダルを砂浜に脱ぎ捨てると砂が熱いのでぴょんぴょん跳ねながら、服を着たまま海に走っていきダイブした。
ざっぱーんという音と共に海に抱かれた。その時に自分の一つのミスに気付いて少し恥ずかしくなった。
荷物ごとダイブしていたのだった。もしもの時のために予備の着替えを持ってきていたので迷わず服を着たままダイブしたのだが、肝心の着替えまでもが濡れてしまっては着替えを持ってきた意味が無かった。

こうして私は自分をアホだと認めざる負えなくなった。そんな私にも、せめてもの救いは以外にも訪れた。
私が海面からひょっこりと顔を出したところに海水を頭から浴びた。彼が私と同じように服を着たままダイブしたらしかったが、彼が私と違うのは荷物を置いたところくらいで他は私となんら変わりは無かった。そんな彼に私は冷たい口調で
「バカじゃないの？」そう言い放つと、彼はそのお返しとばかりに「それは北風もだろ？」と言い返してくる。
それから数秒の沈黙のあと彼が笑い出したのにつられて私も久しぶりに声を上げて笑ってしまった。

それから遊んで、遊んで、いっぱい遊んで夕日が空を海を砂浜を森を僕たちを真っ赤に染めてしまうまで遊んだ。
彼の「そろそろ海から出よう」と言う言葉が無ければずっと遊んでいただろう。
明日は天界に帰る日だから今日を楽しまなくちゃと思いつつもそれを上回ってしまう不安。
そう明日は天界に帰る日なのだから今日の内に彼に想いを伝えて・・・それから私は、彼はどうするのだろうか？
彼の記憶から私が消えてしまっても、私の記憶から彼が消えることは無い。
果たして私は耐えられるだろうか？湧き上がる不安に、弾けそうな好きに、耐えることが出来る？無理。服を乾かすために低い木の傍まで行って服を脱ぐ間ずっとそんな自問自答の繰り返し。そして出た答えはネガティブな今の私らしい答えだった。
「私、明後日には居なくなっているから、明日で大切なもの探しは終わるから」それに対しての彼の反応を確認したあと私は裸の状態で驚いた顔で私をボーっと見つめる彼の前まで行くと彼のことを押し倒し馬乗りの状態で
「明日、私を殺して・・・・」その言葉は私の一時的な感情の欠片

だったのかもしれないし、そうじゃないかもしれないけど、その時の私はその言葉で彼を引き裂きめちゃくちゃにしたかっただけだった。
ずるいよ！と言いたかったのかもしれない、誰かにいつでも恋することが出来る彼がずるい。
私を忘れて他の人とお話ししたり、食事をしたりするのが嫌！この行き場の無くなった感情を今すぐにでも誰かにぶつけたかった。
「明日、午後三時にあの遊園地で待ってる。」だからそう言い残すとすぐに私はまだ乾いていない服を着ると荷物を持って来た道を戻った。
彼は私を追ってくることは無かった。

第二章の４！（後書き）

いかがでございましたでしょうか？
狂ってしまった人がいたり、なんやらと
今回はそんな話しでしたが第二章は残すところあと二回で終わってしまうのです。
大変です。
次にここに載せるお話を書いてないんですよ。
なんてことだ！
大変だ！大変だ！大変だ！
と、言うほど大変な事態ではないのですが・・・
まぁ、書けるよね、一週間くらいあれば・・・
無理かな・・・無理だね。
クリスマスくらいまでには書いておきたいね。

と、そんな感じの独り言でした。
あと少しだからＨＰの残ってる人は最後まで読んでください。
残ってない人は回復して読む気になったら読んでください。
それではまた次回！
ドロンッ！ごほっごほっ・・・ドンガラガッシャーン

第二章の5！

5

天界に帰る日はすぐにやって来た。
もう少し彼と一緒に居たかった。変な話題で妙に盛り上がったり、怪談話で彼を怖がらせたり、クリスマスには彼とショッピングを楽しんで、学校では親友と言える存在に出会って恋の話で盛り上がったり、ノロケ話でいっぱいノロケたり、彼と喧嘩をすれば親友に愚痴を聞いてもらって、逆に親友が悩んでいたら助けになってあげたり、私にはまだやりたいことがいっぱいあるのに天界に帰らなければならない。
最初はあんなに早く帰りたいと思っていたのに今では帰りたくなくなっていた。
それでも最後の日はやって来たのだった。

別れるのがより一噌辛くなった私は彼女を頼ることにした。
そう思いついたのは朝の十時だった。すぐにハート形の携帯電話の名前リストから水谷桜の名前を選ぶとすぐに彼女に繋がったので会いたいということを伝えたら、遊園地近くの喫茶店で待っててと言われたので私はその喫茶店へと雨の降る中、傘を差しながら急いで向かった。
喫茶店に着くと「待ってて」と私に言った水谷桜が私より先に来て待っていた。
私は彼女に軽く挨拶をすると彼女の向かいの席に座り紅茶を注文するとそれが来るのを待っている間に彼女に質問をした。
「私の兄と離れていて不安にならない？」
彼女は少し考えてから優しく答えてくれた。
「好きだから・・・かな？好きだから信じて待っていられるの、た

ぶんね」
「じゃあ会いたいとは思わないの？」
「会いたい、すごく会いたいけど・・・堕天使となって消えてしまうでしょう？消えて二度と会えないよりも次に会えるって思ってそのときはまず何から話そうかな？とか一緒にどこへ行こうかな？とか考えて過ごすの、そしたら次に会ったときにはもっと好きになっているはずだからとかね？」ふふっと彼女は笑うとこう続けた。
「大丈夫、私が純也を好きになる女を片っ端から潰してあげるから♪その代わりに一つ頼まれてもらえない？」
「私に出来ることなら・・・質問に答えてくれたお礼です。」このとき思ったのだ。この人となら友達になれそう。
「ありがとう」彼女はそう私にお礼を言った。

それから待ち合わせの時間ギリギリまで彼女と話していた。
喫茶店を出ると既に雨は止んでおり完璧に晴れていた。
「じゃあ、またいつか会えたら！」彼女が喫茶店の前でそう言って私に背を向けたときに私は彼女を呼びとめ
「あ、あの・・・・またね！」そう言って微笑む彼女に背を向けて彼の待つ遊園地へと駆け足で向かった。

遊園地の前で彼と合流し、ギャンブル（三角くじ）で当てた券を彼に渡すと二人で園内に入り少し迷いながらも観覧車の待ち列に並んだ。
待ち時間は約二時間だから・・・ちょうど観覧車が一番上に着いたときに天界に帰るための橋が架かるはず・・・なんだけど、ここまで来て私はまだ迷っている。
このまま観覧車に乗って十年間彼と離れ離れになるか、観覧車に乗らずに彼と一緒に三時間過ごして血を吐きながら彼の前で死んでいくか、両方ともメリットもデメリットがある。
一つ目の選択肢は十年後また彼と会えるかもしれないが、彼は次に

私に会うまでの間、私のことを忘れてしまっているから、他の女と結婚しているかもしれない。
二つ目の選択肢は永遠に彼の記憶から私が消えることが無くなる代わりに私の命が尽きてしまう、だが私の中にある選択肢の天秤は意外にも二つ目の方に大きく傾いていた。
そしてタイミングよく私は天界の天使管理書の第二章を思い出した。
『天使が人間に恋をしたとき、天使が地上を一時的に離れる場合に人間に自分の正体と想いを伝え、その想いを人間が受け入れたときのみ人間の記憶に天使の記憶が残るものとする。』
昔、興味があって兄の部屋でこっそりと読んだあの一万章もある管理書がこんなところで役に立つとは思ってもいなかった。
これで第三の選択肢が出来たことのなる。
そもそも私はまだ彼に想いを伝えていないのだったからちょうど良い。
このとき私の中にある選択肢の天秤はちょうど真ん中のところで止まった。
一つ目の選択しがいやなら二つ目を、二つ目も嫌なら一つ目と二つ目の良いところだけを取った三つ目の選択肢を選べば良い。こんな単純で前向きで自己中心的な考えが今まで出来なかった自分が恥ずかしい。だがこの先に私にはもっと恥ずかしい試練が待ち受けているのだからそんなことを気にしていたら手に入るものも手に入らなくなってしまう。
私は第三の選択肢を自分で選んだ。だからそれを最後まで貫き通す。
私はそう決めた。

そして告白のときが刻一刻と近づく中、彼が私を嫌いだったらどうしようとか、もし付き合えても彼がお金欲しさで私と付き合っていたらどうしようとか、実は彼は地球外生命体と人間の間に生まれた子供で、十年位前に両親を殺された怨みで地球を滅ぼそうとしている自称ラスボス・・・・・の下っ端でリストラ寸前で、アルバイ

トで稼いだお金を貯めていつか自分が自称ラスボスになってやる！とかいう小さな夢を胸に秘めて今日もどこかで黒の全身タイツ着て、正義のヒーローと戦ってたりして（隣に居ますが・・・）とか、とにかく私は今、もの凄くブルーになっているのだ。しかもただのブルーじゃない！『マ』と『リ』と『ッ』と『ジ』が付く最強でもないブルーなんだ！これは女性特有の病気と天界では習ったがこれは死ぬのだろうか？などと間違った知識を節約しつつ使っているとついにそのときがやって来た。

観覧車に乗り込んだ私と彼はドアが閉まるまで沈黙状態だった。
ドアが閉まると同時に私は彼に天使のことを説明し始めた。
彼も他の人間と同じで最初の方は信じていないと言わんばかりの態度で聞いていたが、彼が
「もしかして天使の観覧車って僕たちが今乗ってる・・・これ？」
そう言って私に確認をとったときには、もうさっき様な顔ではなかった。
そんな顔をした彼はウエストポーチから、以前二人で行ったアクセサリーショップで私が見ていた羽のシルバーネックレスを出すと私にくれた。
それからこれだけでも十分驚いている私を彼は抱き締めた。
その彼の行動に驚いてあたふたしている私の耳元で彼は今にも泣きそうなときに似た声で
「僕は、僕は北風が、氷柱が好きだから、大好きだから何処かへ行ってしまうのは嫌なんだ！僕は絶対に氷柱を忘れない。だから、僕と付き合ってください。」と想いを伝えられてキュンとなった。さらに耳元で囁かれたときに彼の息が私の耳に当たりキュンはキュンドキッ！に進化した。
そのキュンドキッ！が私の計画を、第三の選択肢を消し去った。
「私もっ！私も純也が」私が彼に伝えようとしていた想いは途中で途切れてしまった。

第二章の5！（後書き）

さて、今回は天界に帰る、そんな話しでした。
そして次は第二章の最後です。
ここまで長かったです。
次は何を書こうかなどを考える毎日は
いくら経っても、やってきません。
そうやってのんびりしていると
クリスマスがすぐにやってまいります。
クリスマスの話を書こうかなとも思いますが
たぶん無理です。
そんなひとり言でした。
今回は前みたいにドロンとはいかずに
違うのでいきます。
それでは皆さん、また来週。
タタタタタッ！（壁に向かって走ってる）
バンッ！
「隣の・・・壁・・だっ・・・・た」

第二章の6！

6

天界に帰った私は皆から生温い歓迎を受け、それを軽く流すと私は半年振りに自分の部屋に入ってそれから朝になって兄が部屋のドアをノックするまで泣いていた。
泣き疲れていつの間にか寝てしまっていたらしく、兄が部屋のドアをノックする音で目が覚めた。部屋のドアの鍵が掛かっていなかったのでベットに寝転がったまま「入って」と言った。
「それでこんな朝からモテモテの兄が私に何の用か・し・ら？」と冷たく言ってみたが
「おいおい、俺の妹は素直に帯ぐるぐるとかモデル（主にヌードモデル）ごっことかをしていてもうちょっと可愛げのある奴のはずだが？」と私の消し去りたい過去を態々掘り返してぶつけてきた。そんな兄に伝えることがあったのを思い出した。
「それはそうと、水谷桜って人に会ったの。彼女からバカ大天使長に伝えてって言われたから伝えるけど『いつまでも待ちます。』だって」本当はこのとき嫌だった。彼以外にこんな言葉を言うのは嫌だ。彼が好き。その言葉が心の中で暴れまわって外に出ようとしている。どうにか押さえ込もうと頑張ってみたが無理だった。
いっぱい泣いたはずなのに、もう涙が出ないってくらい泣いたはずなのに、泣いているところを見られたくないはずなのに、気付いたら兄の前で泣いていた。そんな私に兄は
「もっと泣け、泣いて泣いて泣きまくれ、そしたら気長に待て、次に会えるその日までずっと考えとけ、次に会ったとき最初になんて言うかでも考えて待ってろ。」兄は泣きじゃくる私にそう言うと部屋から出て行った。
「お兄、ひっく、ちゃんの、ひっく・・・バカ。」兄の出て行った

あと私はそう呟いてからしばらくしてもう一度眠りについた。

それから十年が経った。
兄は六年前に天使を辞めて人間になり地上で待つ水谷桜のところへ行ってしまった。
そして私は今日やっと彼に会うことができる。十年前のあの日、部屋で泣いていた私に兄は考えながら待てと言った。だから私は次に彼に会ったときに伝える言葉を九年と十一ヶ月の間、心に閉じ込めてこの日を待っていた。
私は天使を辞める手続きを済ませると彼の待つ場所へと自分の翼の代わりに彼がくれた羽のネックレスをして飛び立った。

第二章の６！（後書き）

第二章の６！
楽しんでいただけましたか？
この「夏ふたり」は、次のエピローグで最後です。
そこでクリスマスの日に載せてみようかな～などと
考えております。
まぁ、彼氏ｏｒ彼女を待ってる間の暇つぶしていどに使ってくださ
い。
彼氏ｏｒ彼女が居ない人は・・・
読んで、見つけてあげてください。
意外と近くに居るものですよ。
それではクリスマスまでお待ちください。

エピローグ

エピローグ

たしかに僕はあの夏、誰かを好きになった。
その人がどんな姿でどんな顔でどんな声でどんな名前だったかを思い出すことが出来ず、思い出そうとすると頭が割れるんじゃないかってほど痛む。
そんなことが何度も繰り返し起こるから、心配になった親に病院へ無理やり連れて行かれ精密検査を受けたのだが、どこにも以上は無く医者はお手上げ状態だった。
そんな日々が続き、普通の日常から何かが抜け落ちたと思い始めてから、もう十年が経った。
僕はあれから補習のおかげかどうかはわからないが、成績が異常なスピードで伸び簡単に有名な大学に入ってキッチリ四年で卒業し今は東京のゲーム会社のバグチェック担当になり、ゲームと一緒に暮らしているような毎日を送っていた。
そして久しぶりにどこかへ行けるくらいの暇が出来たので実家に帰ることにした。
だが帰ってすぐに遊園地に行きたくなり荷物を家に置いてから遊園地へ向かうことにした。
その途中の公園付近で幼馴染の水谷桜に出会ったが、彼女は「早く会えると良いわね」そう僕に言ってすぐ公園の前に居た黒髪の青年と共にどこかへ行ってしまった。

僕が遊園地に付くころには既に五時を過ぎており人はそんなに居なかったが、それでも観覧車には行列が出来ていた。
僕は観覧車に乗らなきゃいけない気がして急いで列に並んだ。
それから一時間が過ぎようやく観覧車に乗ったときには空が赤く染

まり始めていた。
そして僕は小さな密室空間に一人で入り、座って思い出そうとした。
大切な何かを。
でも思い出そうとすると頭が割れるように痛い。それでも思い出そうとすることを止めず目を閉じて思い浮かべる。
男が一人では絶対に入ることの無いアクセサリーショップ。
逆の願いが叶う逆神社で行われるお祭りの花火。
行ったことが無いはずの隣町の朽ちた映画館。
森を抜けた先にあった砂浜。
どれも何かが足りない、思い出せない。
僕の心の中で暴れまわるこの想いは誰のために在るものなのか分からない。
幼馴染の「早く会えると良いわね」と言う言葉の意味と彼女と一緒に居た黒髪の青年。
僕は何にもわからい。早く誰に会うんだ？実家の僕の部屋に書かれていた人の名前は誰のことを言っているんだ？僕には理解できないことばかりだ。
北風氷柱（きたかぜつらら）というのはどこの誰だ？わからない。思い出そうとすると頭が痛む。
でも思い出せないと心にぽっかりと穴が開いたままで嫌だ。
痛い、いたい、イタイ、心が、頭が、痛いよ。
そのとき今にも沈みそうな太陽の光が差し込んだのが目を瞑っていた僕にもわかった。
「好きです。私はいつも明るくて、優しくて、私のことを好きな須藤純也が・・・」
僕は目を開ける。日が眩しい。一度目を閉じすぐに開けて目の前にいる彼女を見つめる。
今まで時間が止まっていたかのように彼女はあの時と同じ姿でそこにいた。
そして彼女は頬を少し赤らめて笑顔で僕の忘れていた彼女と過ごし

たあの夏の記憶を思い出させてくれた。
「大好きです。」
二人は夕日で赤く染まった二人だけの空間で再会した。

エピローグ（後書き）

ついに終わりました。
ついに、ってほど長くないですが・・・・。
次のお話しは書き終わるかな～
さて、次にお会いするときまで・・・・・
何年かかるかな？
それは誰にも分からない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9330e/

夏ふたり

2010年11月17日14時28分発行